

## 勝海舟寓居跡 福島屋(清水平右衛門邸)跡

和歌山市舟大工町28

- ▶ ~文久3年(1863)3月、4月の勝海舟の動向~  
軍艦奉行並勝海舟は、文久3年(1863)3月1日以降、大坂の北溜屋町(現在の大阪市中央区淡路町)にある専稱寺を寓居先として定め、摂海(大阪湾)の海岸防衛に関し砲台の設置などをすすめるため、大坂を中心に仕事をっていました。  
紀州藩家老久野丹波守は、同藩の浜口儀兵衛に指示し、勝海舟に砲台と海岸警備の検分を依頼しました。  
文久3年3月29日の勝海舟日記に御書付として次の内容を記載しています。

### ◎御書付

紀伊殿御領分海岸、砲台の儀につき、其方へ御談じなられ度き旨、仰せ立てられの趣もこれあり候間、紀州へ罷り越し、久野丹波守申し談じ候よう致さるべく候。

3月30日紀州へ向かうため出立し、その日は岸和田で1泊しています。4月1日は泉州田川(現在の岬町多奈川谷川)へ1泊。4月2日は加太で1泊。4月3日に和歌山へ到着しています。

和歌山では加太を歩き来しながら4月13日まで滞在します。

その間は、紀州藩第14代藩主徳川茂承(もちつぐ)への拜謁をはじめとして、藩の重役と海防、砲台、海軍の必要性などについて議論を交わしました。

勝海舟は4月3日から13日まで紀州藩領内に滞在し、和歌山城下では福島屋という清水平右衛門の屋敷を寓居先として滞りました。

南海和歌山市駅から東南に行った所にある「ファミリーショップ・クイノセ」の前に石碑があります。

和歌山歴史博物館の学芸員の方にお伺いすると、石碑の場所が福島屋跡にあたるのはどうも疑わしいとの事でした。

現在は舟大工町に石碑が建っていますが、橋丁のあたりが正しいとの事です。

この福島屋には、前述の南方熊楠の父南方弥兵衛が番頭を務めていたことがあり、熊楠は父から勝海舟が滞在していた話を聞いていたそうです。

勝海舟日記に次のような記載があります。

文久三年四月三日

若山(和歌山)表へ着、片原町福島屋平左衛門方旅宿。田中庄蔵、諸事周旋。夜に入り、御用人・向笠三之助、書物方・津田楠左衛門来る。友ヶ島防禦、砲台の事を云う。且、明日、伝法と唱う別館にて、重役・久野丹波守、岡野平太夫、佐野出羽守出会い、海峡、防禦の策を問う趣を申す。



勝海舟



### 浜口儀兵衛

浜口 梧陵(はまぐち ごりょう)。紀伊国広村(和歌山県有田郡広川町)出身の実業家・社会事業家。梧陵は雅号。浜口梧陵は、紀州湯浅の醤油商人(現在のヤマサ醤油)の子として生まれ、第7代目の浜口儀兵衛にあたります。若くして江戸に上り見識を広め開国論者となり、海外留学を志願しますが、開国直前の江戸幕府には受け入れられず、30歳で帰郷して事業の傍ら故郷に学校(現耐久高校)を建てます。儀兵衛は大量の藁の山に火をつけ、安政の大震災の二次災害「津波」から広村の村人を救った通称『稲むらの火』でも有名です。

## 8 紀州藩校学習館跡

和歌山市湊紺屋町1-10

- ▶ 正徳3年(1713)、第5代紀州藩主 徳川吉宗によって設けられた藩の講釈所です。その後、「学習館」と名称が変更されました。現在この地にある株式会社世界一統は、学習館の跡地を南方熊楠の父である南方弥右衛門(初代)が紀州候から譲り受け、酒造業として創業しました。碑には次のような説明が記載されています。

正徳三年(1713)五代藩主徳川吉宗によって創建され、当時は講堂と呼ばれたが、その後衰微した。  
寛政二年(1791)十代藩主治宝が再興し、藩校学習館を開校した。  
東西35メートル・南北50メートルの敷地を占める。  
学習館は藩士およびその子弟の教育に当たったが、慶応二年(1866)岡山へ移転し、この時、一般庶民にも門戸を開いた。



## 9 勝海舟訪問の地 紀州藩伝法の別館跡

和歌山市湊紺屋町1-8

- ▶ 藩校学習館の西隣に紀州藩伝法御殿という施設がありました。勝海舟寓居先である福島屋からそれほど離れていません。勝海舟は、文久3年(1863)4月3日に和歌山に到着し、福島屋を寓居先としますが、翌日、紀州藩の久野丹波守、岡野平太夫、佐野出羽守ほか、海防担当者数人と友ヶ島防禦について議論するため同藩の伝法の別館(伝法御殿)を訪れました。このとき海舟は海軍の必要性も説いています。また、4月10日にも再度、伝法の別館(伝法御殿)にて、久野丹波守と面談し、友ヶ島砲台、海軍のことを話し合っています。

